

春燈

10月号

October 2011



主宰の句

安立公彦

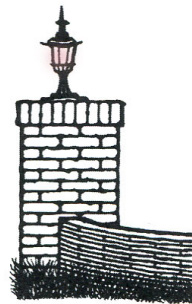
書肆出づる靴音ひとつ夜の秋

短夜やすだれ越しなる港の灯

ゆく夏のー塔高き東寺かな

蟬しぐれむかし軍靴の往きし道

国道三号線けふ人まれに終戦忌



成瀬櫻桃子の句

鈴虫の鈴よ佛と二人ゐて

『自註現代俳句シリーズ成瀬櫻桃子集』昭和四十四年

「母が仏となつてから二人で話すことが多くなつた」と先生は自註でしみじみと言われている。男性は長じて父よりも母を恋しがるという。幼くして父と別れ、母と祖母と暮らした先生にとつて、母はどんなにか慕わしかったことであろう。多忙な先生の日も終わつてやっどくつろぐ夜の一刻、仏壇に話しかける先生の和やかなお姿が、目に浮かぶ。庭で鳴く鈴虫の声も美しい。

中野あぐり

成瀬櫻桃子の句

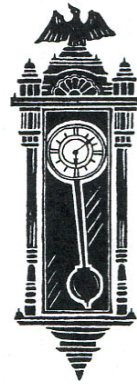
沈むあり浮かむあり鳩、もとの数

『成瀬櫻桃子集』昭和四十五年

掲句は先生の自選三百句の中の一句。「俳句を作ったことの無い人には褒められる句」と記されているが、単なる写生ではなく人生に託した思いの深い句だ。「散文化」と「難解化」が目立つ現俳壇において、誰からも褒められる余情句が詠まれるべきではないか。先生が生涯に公表された句は約三千句。その根底には人生の悲運を余情ある詩情に昇華した境涯詠が貫いている。

小泉 貴弘

燈下集



○ 松本俊介

日盛や地蔵を洗ふやせ束子
陶枕や覚めてたつたの四半刻
蝙蝠や富の名残の深庇
あの頃の星の多さよ夜干梅
親の下駄子の下駄音の宵宮かな

○ 堀内五齡

薰風に何語らふやモネ母娘
身ほとりを詠みあぐねたり梅雨を病み
ふるさとに遊子とし聞く河鹿かな
亡父の香を書斎に拾ふ帰省かな
汝もまた熊襲の裔ぞ日焼濃し

○ 小菅礼子

息災なればこそその汗流しけり
雨上りはじめましての青蛙
初ひぐらし一ト声のみの早とちり
木下闇休めと石と風の声
年毎に減りゆく名草吊恋

○ 栗原完爾

数学の不得手な少女メロン切る
水番の貌となりたり学習田
裏庭に声あげてゐる茗荷の子
古書店の寧けき時間終戦日
まづ予後の話となりぬ水羊羹

○ 生田高子

晩涼や江戸手拭の艶二郎

肉食べて血を汚しぬる晩夏かな

雲よぎるちひさき雲や土用東風

青簾こどもの声の通りけり

新諸の紅美しく売られけり

○ 森下賢一

夏の霧オホーツクとは何の意味

喜雨至り雑誌立読みにてすます

すれ違ふマイケル・ジョーダン片陰に

廃車好き鳥の群れて大早

ビアホールイタリア語のみすぐ分かり

○ 野崎昭子

足音を控へて茅の輪くぐりけり

船霊の遊べるごとし夜光虫

赤い爪かかへて蟹の立止まる

野仏の肩に坐禅の雨蛙

サロンパスの匂ひ漂ふ晩夏かな

○ 本多遊方

蟬鳴いてわが夏ここに始まれり

青田風けふも御飯のうまかりし

青田波いつたい何処に非がありや

晩夏光御影の墓石照り返す

鉢植の水を欲しがる原爆忌

○ 岡野イネ子

白玉や雀のお宿てふ小店

いらつしやいインコがさげぶ甘味店

須田町の八月九月のぜんざい屋

無沙汰詫び台風の夜の長電話

さぎ草に雨足しげくなりけり

○ 武田巨子

朝涼の馬具の螺鈿の光かな(祭の馬)

母二人の忌日連なる祭鱧

祇園会の飾り団扇や母との日々

旧姓で呼ばるると日盆休

地震の地に友たづぬるも蟬浄土

当月集

安立 公彦選



○ 川崎真樹子

前世の名を蛸に問うてみる
落款に込むる思ひや書涼し
秋風鈴さだめのやうに風拾ふ
目に見えぬ傷に滲む血原爆忌
秋暑し物言ふ自動販売機

○ 齋藤晴夫

天涯に育つ峰雲芳雄逝く(悼原田芳雄)

面とれば媼や鎮守の薪能

関守石の奥の日差や苔の花

鎌倉の松風通ふ夏書かな

糟糠の妻の甘酒きこしめす

○ 矢田有年

島唄や石屋の窓の仏桑花

どこよりの笛の音色や青葉風

撫子の咲くや災禍の浄土浜

白蓮のうてな揺るるや浮御堂

釈迦堂のくぐもり声や梅雨じめり

○ 矢口笑子

炎天を太郎の太陽笑ひけり(岡本太郎美術館)

三伏や極彩色の中華街

真つ白な雲の造形ソーダ水

太陽の雫ふりまく水着かな

仮名書の金魚の墓標夏終はる

○ 藤原若菜

明易やけふ為すことを準ふる

せせらぎの音に重なる蟬の声

無花果の葉の騒ぎそむ夕立風

簞を透きくる風も晩夏かな

鱚雲久の便りを出しにゆく

春燈の句

安立 公彦選



水平線の先はアメリカ葎賣茶屋

東京 小島 昭夫

螢火や和泉式部の歌ごころ

乗り付けて外車自慢や盆の僧
如何ばかり「仮設舎」に見る盆の月

草刈機の音止みてより草匂ふ

空海は筆を選べり夏木立

東京 大草由美子

不揃ひに刻む留守居の胡瓜もみ

縁うすきうから踊るや走馬灯

夏座敷足をくづして人を待つ

千葉 吉村さよ子

旧道を繋ぐ家郷の夏惜しむ

母逝きぬ干飯の皿に飴のこし
冷し酒弱き女の顔し吞む

心置きなき話のつづく夜の秋

埼玉 茂木 なつ

信号の色のけだるき日のさかり

夏枯や半時はやき店じまひ

東京 坂本依誌子

昨日けふ父の忌師の忌夏果つる

夏月の月漫ろになぞる李白の詩
時差ぼけもなく遠来の子の夏休
風入やもの言ひたげな亡夫の紋
お伽噺に祖母の膝あり盆の月

日暮まで開放つ窓秋涼し

奈良 小田 明美

露草や茶箱点前の金米糖

遠雷や君ありし日の酔芙蓉

落し文うかと拾うて恋に落ち

神奈川 石田 康明

広島忌こころのケロイドにも水を

線香花火ぼとりと堕ちて夜の底
白瓜の闇にランタン灯すごと

余言

安立公彦

別れ鴉声はしつ々暮れにけり

浅野 洋子

「別れ鴉」とは余り見かけない季語だ。一部の歳時記によると、陰暦七月の別れ鴉と言つて、成長した雛は、七月になると他所へ別れ去ると言う。傍題、「鴉の子別れ」。同時発表の句に〈ほぼづきの色づき初めし子の忌かな〉、〈小流れの奥より精霊とんぼかな〉の句がある。この三句は作者にとつてはともに一体のもの。早生のお子さんを別れ鴉に託した思ひは、句を読む人の胸を打つ。しかしこの句はそういう私的な思ひを離れても、この季語の作品として、十分に鑑賞に耐え得る句だ。

夏豆や善くぞメンデル修道士

卯木 堯子

「夏豆」は新枝豆。「メンデル」は「メンデルの法則」を發表したオーストリアの植物学者。彼はまた修道士でもある。辞書によると、修道院の庭でエンドウの人工交配による遺伝実験を行い、「メンデルの法則」を発見したとある。植物学者で修道士であるという人物が興味を呼ぶ。

作者は今、冷えたワインを酌みながら枝豆をつまんでいたが、ふとその手を止め、枝豆・遺伝実験、メンデルと思いをめぐらすのだ。この句の成功は、「善くぞ」の一語にある。それはメンデルを称え、夏豆を称美し、そして如何にも俳諧の意に適っている。

夫の分いささか残しさくらんぼ

太田 慶子

初めてこの句を拝見したのは、七月本部句会の席に於いてだった。一読「滑稽」の思ひが湧き、それはまた愉しさを誘つた。「滑稽」で大事なことは、それが意図されたものであつてはならない、ということである。

この句の「いささか残し」からは、夫への愛情と、作者の心根の優しさが充分に読みとれる。

谷崎忌らふそくの翳涼しかり

割田 容子

「谷崎忌」は七月三十日。昭和四十年没、齢七十九歳。その墓碑は京都法然院の奥まった墓域にある。寂と空を刻んだ

碑が二つ相隔てて立っている。

昨年秋の関西大会でつぶさに拝礼することが出来た。作者も谷崎文学の愛読者なのだ。この句を見て、『陰翳礼讃』を思い出すのはごく自然なこと。永く日本の文化を支えて来たものの一つに陰翳がある。陰翳は光を拒否しているのではない。光を効果的に生かしているのだ。

谷崎忌の頃は暑気の最も厳しい季節。そういう夜、一本の蠟燭の火明りに涼をとる作者。いい風景である。

端居して借景ばかり褒めらるる

白神知恵子

「端居」という季語は、数ある季語の中でも、最も日本的な生活感を伴う季語の一つと言えよう。この句、そういう季語の持つ情緒から離れて、同席している人の言動を前面に出しているのが面白い。

久しぶりに訪れた客。縁先に蚊遣りを焚き談笑する一とき。しかし客は作者が愛して止まないわが庭にはふれず、はるかな借景ばかり称える。借景が栄えるのは、前面の庭の良さがあつてのこと、と作者は分かっているが、分かっているがなお無然とした表情が見えて来る。「端居」という一景を共にする客と主の様子が良く描かれている。

太陽の雫ふりまく水着かな

矢口 笑子

表現は伝統的な「かな止め」の形だが、内容はまさに現代

の風俗である。この水着は干してある水着ではなく、水着をまとう若い女性の謂である。

浜辺でビーチバレーでもしているのか。水着姿の若い女性たちが、嬉々として動き回ると、その身体から海水や汗の雫がとび散る。それは如何にも「太陽の雫」と呼ぶにふさわしい生命力に満ちた水滴である。へ真つ白な雲の造形ソーダ水も、そういうビーチでの一景。

秋風鈴さだめのやうに風拾ふ

川崎真樹子

「秋風鈴」と言えは、へぐるがねの秋の風鈴鳴りにけり蛇笏を思い出す。こういう句のある季語は、作ろうと思つても、この句が立ち塞がつて思いがままならない。

作者は一句を擬人化し、敢えて「秋風鈴」に挑戦した。「さだめのやうに」がいささかの観念を誘うが、それもまた、「風拾ふ」で助けられている。

わが家の風鈴もそろそろ取り込まなくてはならない。

島唄や石屋の窓の仏桑花

矢田 有年

この「島唄」は沖縄の民謡だろう。むしろ琉球民謡と言ふべきか。真夏の午後、どこから流れてくるのかその島唄の節は、旅人の胸に内地とは異なる妙なる音色を伝える。

窓近く仏桑花が真紅の花を咲かせている。この句、「石屋の窓」が良く効いている。同時発表の、へ撫子の咲くや災禍の浄土浜の句も良い。(以下略)